2019年度　　FB

論　　述

注　意

1. 問題は全部で5ページである。
2. 解答用紙と下書き用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。
3. 解答はすべて解答用紙に縦書きで記入すること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離してはいけない。
5. 解答用紙および下書き用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

次の文章を読み、以下の問に答えなさい。

問一　傍線部(1)～(5)の漢字の読みをそれぞれ平仮名で書きなさい。**解答用紙(その一)を使用**

問二　傍線部(A)「稲村の訳語はすれちがいであった」の具体的内容を、一〇〇字程度で説明しなさい。なお、アルファベットを用いる場合は、ひとマスに二字記入し、二字を一字に換算すること。またアルファベットの数が奇数で、最後のアルファベットを記入したマスが半分空く場合は、その半マスを空けたままにし、次のマスから文字を埋めること。**解答用紙(その一)を使用**

問三　傍線部(B)「無知のかくれ場」としての神秘主義に逃げこむ」という表現が示している内容を五〇字程度で説明しなさい。**解答用紙(その一)を使用**

問四　この文章は一九八〇年代に発表されたものです。筆者の主張をまとめたうえで、それが現在も妥当であるか否か、具体的な例を挙げながら八〇〇字以内で論じなさい。**解答用紙(その二)を使用**

ヨーロッパでは「自然」はどのように考えられていたのだろうか。古代ギリシアでは、「自然」はギリシア語でphysis(ピュシス)とよばれ、このことばはphyomai(ピュオマイ、生まれる)という動詞と結びついており、おのずと生まれ、成長し、衰え、死んでゆくことを意味する。アリストテレスのことばで言えば、「自分自身のうちに運動の原理を持つもの」が「ピュシス」であった。

この「運動」(キーネーシス)というのは、近代のように単に位置の移動だけではなく、「実体」の生成・消滅や「質」の生成・変化、「量」の増大・減少などを含む広い意味のもので、内在的に成長・発展する生命の原理に近いものである。すなわち古代ギリシアにおいては、死せる自然――他から力が加えられなければ、静止するものは永久に静止し、その運動状態を変えない(ニュートンの第一法則)、他律的自然観ではなく、内に生成発展の原理をもった生命ある有機的自然が自然の原型であった。そこでは自然はなんら人間に対立するものではなく、人間はそのような生命的自然の一部に包み込まれていた。神ですら自然を超越するものではなく、それに内在的である。古代ギリシアにおいては、自然は人間や神をそのうちに包み込んだ生ける統一体であり、すべてが「ピュシス」に包まれているという意味で、私はこれを「パンピュシズム」とよんでいる。中国の道教やインドの自然観についても、

ほぼ同じことが言えると思う。

ところで、中世キリスト教世界に入ると、自然はnatura(ナートゥーラ)として捉えられた。naturaというラテン語は、もともとは、ギリシア語のphysisと同様にnascor(ナースコル、生まれる)という動詞から出ており、ローマ時代につくられた「ピュシス」のラテン語訳で、「ピュシス」とほぼ同様の意味をもっていた。しかしこれが中世のキリスト教世界にとり入れられた後、naturaとしての自然は古代ギリシアのphysisとしての自然とは大きく異なる位置をもつようになったことが注目される。つまり、さきに述べた「パンピュシズム」の神・人間・自然の一体性は破れて、代わって神—人間—自然という截然[1]たる階層的秩序が現れてきたのである。そこでは人間も自然も神によって創造されたものであり、神はこれらのものからまったく超越している。人間も自然と同格ではなく、むしろ自然の上にあってこれを支配し利用する権利を神からさずかったものとなる。こうした中世キリスト教世界の自然観は十二世紀のシャルトル学派を通じ、ロジャー・ベイコンを経て、十七世紀のフランシス・ベイコンの自然支配の概念においてはっきりとした形をとる。近代西欧の自然観は本質的には、この中世キリスト教世界に含まれていた自然を継承し、いっそうこれを方法的に自覚発展させたものといえる。すなわち自然を人間とは独立無縁な対立者として、これを客観化し、このまったくの他者に、外からさまざまな操作を加え、分析し利用しようとするものである。そこには自然から人間的要素としての色や匂いなどの「質」を追放し、生命や意識をとり除き、もっぱらこれを「大きさ」「形」「運動」などのいわゆる「第一性質」のみに注目して、それを要素に分解し、因果的・数学的に解析してゆく、近代の機械論的自然観が形成されることになるのである。

これを徹底的に遂行[2]したのが、近代自然観の創始者である十七世紀のデカルトである。彼はこの機械論的世界像のシナリオを貫徹するために、まず物体から「実体形相」とよばれていた霊魂のような生命原理をすべて除去し、これを一様な幾何学的「延長」に還元する。彼はここでも「自然」を表すのにnaturaということばを使用したが、それはすでに「生まれる」nascorという本来の意味を失い、生命的連関を断ち切った「死せる自然」となったのである。彼が「自然」ということばで考えたものは、いっさいの質や生命を欠いた幾何学的な「延長」にすぎなかった。この「延長」を切り刻めば色も匂いもなく、「形」「大きさ」「運動」だけをもった「微粒子」となるが、これが近代の原子・分子の原形である。このデカルトの転換の影響を受けて、今日「自然」は単なる原子・分子の機械論的

ダンスとなり、ギリシアの「ピュシス」や本来の「ナートゥーラ」が持っていた生命的な意味あいを失うこととなった。

一方、心の側もデカルトにおいて「我思う、ゆえに我あり」のことばで示されているような「純粋思惟」と呼ばれるものとなった。これは幾何学的な理性であり、数学を用いて対象を理性的に構築していくものではあるが、生命の血潮が流れることのない冷たい操作的思考である。そしてこの「純粋思惟」と「延長」の谷間に「生命」は抜け落ち、「自然」がその自らの能動性を持たない原子・分子のダンスとなり、そこから他律的な、決定論的な世界観も生まれてきた。このデカルトによって創始された「機械論的」世界像と、さきに触れたフランシス・ベイコンの「自然支配」の理念とが、あたかも車の両輪のごとく結びつき、近代の科学技術をおし進めてきた。それはたしかに大きな成功を収め、世界の合理的分析を可能にし、人間の物質的条件を改善し、今日の科学技術文明を出現せしめた。しかしそれは現代において一つの大きなジレンマに逢着[3]している。なぜならほかならぬこの近代の「機械論的」「自然支配的」自然観が、公害や環境破壊や資源枯渇のみならず、こうした環境や資源とともに生きる人間の破壊――しかも物質的のみならず精神的破滅をもたらしかねないものとなっているからである。今や自然観においても、従来の機械論的な――すなわち、他律的で要素主義的で決定論的な自然観に代わる新たな自然観が登場し、その中に「生命」がそのあるべき場所を持ち、そこにおいて「人間」があらためて蘇らねばならない転換点に遭遇している。

この転換期における新たな自然観の問題に入る前に、十八世紀において日本人がnatureを「自然」と訳したことは正しかったかどうかを検討しておこう。natureのもとになっているラテン語naturaや、さらにそのもととなっているギリシア語のphysisは、すでに述べた「おのずと生まれ、育ち、衰え、死んでゆく」という自律的・自己発展的な意味あいをもっており、他律的な人為が加わっていないということでは、老荘以来の東洋の「自然」の意味と重なりあっている。それゆえ稲村三伯がnatuurというオランダ語の訳に「自然」の語を当てたのもそれほどおかしなことではなかったと思われる。ただし重要なのは、この十八世紀の段階ではnatureはデカルト的転換をとげており、有機体的なものから機械論的なものへ決定的に変換してしまっていたことである。十八世紀の啓蒙[4]思想の一部(とくにディドロ)や前ロマン主義では有機体的自然観が復活したとはいえ、支配的なものはデカルト・ニュ

ートン的機械論であり、そこでは「時計モデル」の他律的で決定論的な自然観が優越し、「自ら然る」自律的・自己形成的な有機的自然観は陰におしやられていたのである。デカルト以後の機械論的自然は、実は文字通りの意味での「自然」ではない。この意味では稲村の訳語はすれちがいであった。(A) しかし現代ではどうだろうか。

そこで現代の自然観の問題に入りたいが、最近のニューサイエンスでは、この自然観が大きく変わってきたように思われる。それは、self-organizing system(自己組織系)という概念で代表されるものである。プリゴジン、アイゲン、ハーケン、ヴァレラ、ヤンツ、モランなどが、こうした考えを推進する人びとに属する。共生進化説のマーギュリスやガイア仮説のラブロックもこの流れに入ると言ってよいであろう。そこに共通に見られることは、自然を自律的な自己形成的なものと捉えることであり、そのためには機械論的要素主義を越えて、自然を全体的(ホリスティック)なシステムと考え、環境との密接な相互作用のもとで、自律的に自己を保存するのみならず、適当な条件のもとでは、新たな自己形成を遂げ、次第に発展してゆくものとしていることである。宇宙の形成から生命の進化を経て、人間の誕生にいたるまで、さらには文化の形成をも含めて、こうした自己組織系の発展として捉える新たな世界観が生まれつつある。

それは従来の他律的また要素主義的で、決定論的な機械論的自然観とは真っ向から対立するものであり、生命を失った死せる自然——時計モデルの自然観を越え出る、有機的な生けるシステムに定位する自然観である。なぜなら生命体こそ自己形成的なものだからである。この意味では、人間や生物はおろか宇宙も、地球も生きている。そして現に生きつつ進化している。人間とは実のところ、こうした宇宙の生命体の一環にほかならないのだ。ラブロックは最近『地球生命圏』(*Gaia*)という本を書いて、地球がいかに微妙なバランスを保って「生きている」かを明らかにした。すでにルイス・トマスは、地球は「一個の細胞のように生きている」といった。われわれはこうした生ける地球の一員として生きている。そしてこうした自己組織系としての生命体を他から強引な干渉によって壊してしまうのが、公害であり、環境汚染なのである。

われわれは死せるものを規準として生けるものをそれに還元するのではなく、逆に「生ける相」をもとにして、自己組織系として自然全体を見直さねばならない。しかしそれは単に古代ギリシアの「ピュシス」やかつての「生気論」に戻ることではない。古代ギリ

シアで自然(ピュシス)を生かすものは「霊魂」(プシューケー)であったが、このプシューケーはアリストテレスによれば一つの「形相」であり、それは全体的・直観的に把握されるが、内部的に十分、分節化されていなかった。またそれは「生気論」の「エンテレヒー」のように捉えどころのない実体を導入するのでもない。現在の「自己組織系」の理論は、「開放系」「非平衡熱力学」「散逸構造」「ゆらぎ」等の明確な概念をもって、まだ不十分なところは多々あるとしても、科学的に探求可能なものである。われわれは(B)「無知のかくれ場」としての神秘主義に逃げこむ必要はない(そしてもちろん真の神秘主義とはこうしたものではない)。それにしても、このようなニューサイエンスの唱導者たちが東洋の思想に親近感を持ち、積極的にそれに学ぼうとしていることは、注目さるべきであろう。

『自己組織的宇宙』(*The Self-Organizing Universe*)の著者ヤンツは、その章のはじめに、仏陀や荘子の言葉を掲げているし、「自己形成」(autopoiesis)なる言葉を造語し、それについていくつもの論文を書いている嘱望すべき神経生理学者ヴァレラに国際会議で会ったとき、その言葉はわれわれの伝統における「自然」(=自ら然る)と同じものだと伝えたところ、彼は我が意を得たりとばかり、「オー・ビューティフル」と言った。このように新しい自然観として登場しつつある「自然組織系」self-organizing system の概念は、奇しくもわれわれの「自然」の概念と踵(5)を接するものとなった。なぜなら「自然」とは、「自ら然る」ものとして、まさに self-becoming であるからである。

単にこの「自然」の概念だけではなく、決定論的因果性ではない「縁起」の概念や、実体ではなく、関係的全体をみてとる「場」ないし「場所」の考えや、自然支配的でなく自然共存的なエコロジカルな見方など、東洋の思想が西洋において最近あらわれてきた思想傾向と相覆うところが少なくない。今や広い意味で西洋と東洋が融合するときが来ているように思われる。

(伊東俊太郎『比較文明』による。原文の一部を改変した。)